

図書 紹介

科学報道の真相—ジャーナリズムとマスメディア共同体

著：瀬川至朗（早稲田大学大学院）

発行：(株)筑摩書房／〒111-8755 東京都台東区蔵前 2-5-3／新書判／283頁／

価格 880円（税別）／2017年1月10日発行

近年、あらゆる分野の進歩が著しく、またその分野が細分化され、なかでも科学や医学分野の進歩は著しい。特に科学関係の報道は、公平さと中立性、正確さとわかりやすさが求められるが、そこに科学報道特有の課題が潜んでいるという。

本書は、新聞・テレビの報道でなぜ失敗がおき、視聴者の不信感を引き起こすのかを科学報道に携わってきた著者が①STAP細胞事件、②福島第一原発事故、③地球温暖化の事例で検証し、研究機関や政府側からの発表攻勢、報道機関の自主規制、科学的不確実性の伝え方、社内組織のパワーバランスなど科学報道のどこに「問題」があり、報道としてどのように「改善」すれば良かったについて解説されている。

序章 科学報道はなぜうまくいかないのか

第1章 メディアはなぜ見抜けなかったのか—STAP細胞問題

第2章 なぜ大本営発表報道といえるのか—福島第一原発事故

第3章 懐疑論をどう「公平・中立」に報道するのか—地球温暖化問題

第4章 マスメディア共同体の構造

第5章 「客観報道」と「公平・中立報道」の問題点を考える

終章 科学ジャーナリストは科学者とどう向きあうべきか

次にサブタイトルを見ていくと、序章は、福島第一原発事故報道におけるマスメディア不信／STAP細胞問題放送と地球温暖化放送でも見えてきた問題などである。第1章は、夜のテレビに流れた「大発見」／一転、科学界を揺るがす大事件に／誰でもが「騙された」気分／初報を載せないという判断は可能だったか／iPS心筋細胞事件との比較／ノーベル賞受賞研究と学術誌掲載論文の違い／ネイチャー誌の責任は追及したかなどである。

第2章は、10メートル以上の津波と全電源喪失／原子力発電所の仕組みと炉心溶融／炉心溶融・メルトダウン・炉心損傷／事故発生4日のうちに3基が炉心溶融／炉心溶融と大本営発表／「炉心溶融」から「炉心損傷」へ／東電TV会議では炉心溶融が語られていた／消えた炉心溶融の見出し／「編集部的心思」と「取材部門的心思」／「本格的な炉心溶融はまだおきていない」という語られ方／記者会見と新聞報道の「炉心溶融」を比較する

／「想定外」にしばられているマスメディア／「全電源喪失」は「想定外」の事故だったのか／「吉田調書」の調査報道はこの点に注目すべきだったなど である。

第3章は、パリ郊外で生まれた「歴史的合意」／『不都合な真実』が指摘を受けた「科学的な誤り」／「バランス報道」という「偏重報道」／米国では半数から4分の3がバランス報道／温暖化懐疑論をめぐる「公平・中立報道」とは／日本の新聞は懐疑論をどう扱ったか／日本にもあった懐疑論とバランス報道／バランス報道の背景に取材考—情報源の一本化などである。

第4章は、マスメディアと学術誌の違い—記者クラブの記者は市民を意識しているのか／取材者—取材対象者のカップリング／編集局の権力構造は社会の縮図／「社員」と「記者個人」の二重性などである。

第5章は、コヴァッチらが提示したジャーナリズムの10の原則／客観性とは科学的方法のこと／客観性を装う発表報道と主観報道／公平・中立報道はなぜ原則ではないのか／バランス・中立・公平についての原理的考察などである。

終章は、科学研究の変容—CUDO型からPLACE型へ／PLACEから見たSTAP細胞問題／3つの事例に共通する「固い」科学観／人間の営みとしての科学研究と科学報道などである。

本書の第1章ではワイドショー的扱いを、2章では事故の緊迫感を思いだし、一方、テレビや新聞の報道は丸呑みにしないということも教えてくれており、是非目通ししておきたい好書である。

なお、第1章STAP細胞問題の中で、学術論文の査読について「査読者に論文のデータの真偽を判断する責任やその掲載論文誌にも責任がある」と主張していることは間違いであることを申し添えておきたい（学会事務局）。